

---

# Fate/another Zero

水無瀬 瞳月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate/another Zero

### 【Zコード】

Z5942Z

### 【作者名】

水無瀬 瞳月

### 【あらすじ】

あらゆる“奇跡”を叶える「聖杯」の力を巡って、七人の魔術師マスターが霸を競い合う究極の決闘劇……聖杯戦争。その戦いのはてに命を落とした間桐雁夜は言峰の長女として再び生をうけた。とりあえず時臣を殴ってやろうと画策するが、雁夜だったころとは余りに違います……

一部(?)キャラ崩壊します

基本のノリは軽いですが、時々シリアルになります

歳の差が公式と違つるのは仕様です

一步、また一步と着実に、雁夜は教会へと歩を進めていく。だがそれの倍以上の速さで、体内の刻印虫が彼の生命を蝕む。耳を澄ませば、血肉を啜り、骨を削り喰らう蟲の鳴き声が聞こえてくる。じくじくと身を苛み続ける刻印虫の痛みは、すでに雁夜にとつて呼吸や心臓の鼓動と同じく肉体の一部となっていたため、それに雁夜が意識をとられることがないが、血の氣をなくした肌の下で蟲がうごめくのに合わせ、引き攣る皮膚は雁夜以外の人間がいれば目を逸らしあくなるほどに醜悪だ。意識は常に朦朧とし、氣を抜くと時間の経過すらあやふやになる状態で、それでも雁夜は一步、また一步と足を運ぶ。

全ては決して許すまいと自らに誓つた願いのためである。

あと何回、戦えるのか。

あと何日、生きていられるか。

そんなことは自分自身にもわからない。この手に聖杯を掴み、桜を間桐から救いだし、あの人に笑顔を取り戻せるなど、それこそ奇跡に期待するしかないのではないか。ならば己は祈るべきなのだろうか。

(〔冗談じゃ……ない……ッ!〕)

そんなふうに弱気になるたびに、雁夜は自らを呪うように呪院する。なにも自分はありもしない救いをもとめて、ここに来たわけではない。葵を奪つた時臣を、桜を棄てた時臣を、この手で叩き伏せるために雁夜は祭壇の前に立つ。胸に燃え盛る憎悪の炎は、肉体の痛みも、葛藤も絶望もすべて灰にした。今の雁夜は敗北の恐怖も忘れ、憎い相手の心臓をえぐり取り、その返り血を満身に浴びることだけに焦がれていた。

軋む扉を渾身の力で押し開け、なんとか身体をいれるとそこには思つてもいなかつた光景が広がつていた。礼拝堂の中を柔らかく照らし出す燭台の灯とは裏腹に、凄惨としか言いようがなかつた。全身の血という血を、内臓という内臓をぶちまけ変わり果てた遠坂時臣がそこにあつた。無事に残つてゐるのは頭部だけでそのほかはものはや、人としての姿を保つておらず、ただの肉片となり辺りに散つてゐる。

「

混乱と衝撃は、実際にハンマーで頭を一撃されたのと同等の破壊力でもつて間桐雁夜に襲い掛かつた。抜け殻のように虚ろな死相は紛れもなく本物であり、その容貌は疑いの余地なく遠坂時臣のそれだつた。その時点では雁夜には、時臣の死を事実として受け入れるしか他になかつた。

「 な 何 何故……？」

足元に散らばる時臣だつたものに氣をかけることもなく、近づきそして唯一残つていた時臣を抱き上げ、見つめる。見下しきつた高慢な冷笑も、慄懾で冷酷な口調と嘲りの言葉も、そこにはなくただ“無”があつた。

そして

「……雁夜、くん？」

その後のことはあまりよく覚えていない。いや、思い出したくな  
いだけなのかもしれない。ただ一つわかつたのは雁夜は、一つ間違  
つていた。

「バーサーカー…」

自分はやり方を間違つたのだ。桜は決して監禁されていたのでは  
なかつたのだから、昼間のうちに遠坂に無理にでも連れていけば、  
有能な魔術師である時臣のことだ…娘が蟲の苗床にされていること  
はわかつただろう。

「……残り全ての令呪をもつて命じる」

結局一人よがりな英雄願望に踊つていただけなのだ。その結果が  
これだ。

「俺を殺せ…」

その日たつた一人のためにヒーローで在ろうとした男の人生に幕  
がひかれた。

神秘学の語るとこによれば、この世界の外側には次元論の頂点にある『力』があるという。ありとあらゆる出来事の発端であり終焉、この世の全てを記録し、この世の全てを創造できる神の座。それを魔術師は『根源の渦』といいそれに到ることを悲願としている。しかし実際はそんなものではないと、世界をのぞき見ていた神はせせら笑う。世界の外とはまた別の理を持つた世界があることであり、出来事の発端も終焉も、全ては数多い神の気まぐれ一つ。そんな事実も知らず、世界の外へ到ろうとする愚かな魔術師達が、その神はどうしようもなく愛おしかった。

「想いに焦がれ死ぬ…か、いやはや人間とはどうじていつも愚かで愛しいのかな。やはりこの手で一度造つてみたい…」

神に名を連ねるソレは呟く。しかし、それは容易ではない。始まりの闇たる神が、初めて造りあげた出来損ないの欠陥品だが存外、人というものは複雑である。

「器くらいは造作もないが魂となると些か荷が重いな」

だが、不可能ではない。ソレが覗いていた世界はもつとも神に近い。そこでなら干渉もしく、尚且つアレがいる。

「ちょうど壊れた器もることだしな」

世界を一瞥。映るは、壊れた一人の男。

「どうせなら完全に道を壊すのもまた一興か」

どうせアレのおかげですでに道は歪んでいる。神自ら歪みを加えることは、不敬なことであるが、すでに歪んだものを壊すことは咎められるものではない。

「ああ、楽しめよ間桐雁夜」

同日、カラカラと音をたて、廻っていた歯車がその動きを止め、新たに風がふきはじめた。

始まりは三人の魔術師だつた。アインツベルン、マキリ、遠坂、彼らが企てたのはありとあらゆる願望を実現させるという聖杯の召喚。三家の魔術師は互いの秘術を提供しあい、ついに『万能の釜』たる聖杯を現出させることに成功した。……だが、その聖杯が叶えるのはただ一人の祈りのみ。それから協力関係は血を血で洗う闘争へと形を変えた。これが『聖杯戦争』の始まりである。以来、60年に一度の周期で、聖杯はかつて召喚された極東の地『冬木』に再来する。そして聖杯はそれを手にする権限を持つ者として、7人の魔術師を選抜、その膨大な魔力をもつとして『サーヴァント』と呼ばれる英靈召喚を可能とし、誰が担い手として相応しいか死闘でもつて見極める。

「告げる」

男は紡ぐ。この世でただ一人、悲しませたくなかつた女性を想い

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の劍に」

間桐の魔術『刻印虫』を擬似的な魔術回路とし、その身を糧に魔力を練り上げる

「聖杯の寄るべに従ひこの意、この理に従ひなれば應えよ」

蟲に犯され頭髪が残らず、白髪にならつとも

「誓いを此処に」

左半身が麻痺し、一度と機能が戻らなくとも

「我是常世總ての善と成る者」

寿命がもつてあと三週間程度だとしても

「我は常世總ての惡を敷ぐ者 されど汝はその眼を混沌に纏らせ侍るべし…」

振り返らず、立ち止まらなかつた。刻印虫を刺激し活性化させる負担は、四肢を痙攣させ、端々の毛細血管を破り血を滲ませる。それでも、彼は精神の集中を緩めない。

（桜ちゃんのために、何より葵さんのためにも俺は、ひけないんだ！…）

願いは己ではなく自身の、最も大切な女性のために。

雪が深々と降る。空を舞う六花は辺りを覆い、昼とは一転し白銀の世界を作りだしていた。12月25日..キリストが生まれたとされる日に、イタリアの病院で一つの命が生まれた。大きな産声を上げ、元気に生まれてきた女の子は『言峰綺璃』と名付けられた。

「ふふつ、そんなとこに立つてビリしたの? 綺礼」

産後の経過もよく、生まれたばかりの娘を抱きながらあやしていると病室の入口に長男、綺礼が立っていた。いらっしゃいと、手招きすればベットまで寄りしげしげと、腕に抱かれている妹を覗き込む。

「…赤ちゃんってこんなに小さなんだ」

感心したように言ひ、常ならぬ息子の様子に微笑み母は冗談交じりの言葉をかえす。

「あら、この子はおつきにほうなのよ。あなたなんてもつと小さかつたんだから、もしかしたら妹のほうがおつきくなつたりしてね」

「それは…いやだ」

それに今年14となる兄、言峰綺礼はムスッとし眉間にしわをよせるが、赤ん坊のことは今だ興味深そうに見ついている。しかし、その小さな手に触れようと手を伸ばしたが、途中で引つ込めてしまった。揺れる瞳に妹を[写]し、その視線には愛おしさが宿っているが、触れることはしない。そんな綺礼を見て母は苦笑を一つ零し、大丈夫よと笑う。

「代行者であることを気にしたの？」

「…はい」

10代から異端討伐の殺人部隊に所属している綺礼は、生まれたばかりの妹に己の、朱に浸かった手で触れていいのかと躊躇したのだ。

「そう…よかつた」

「はあ？」

「だつてあなた、ちつても子供らしくないんですもの」

小さいころから凡そ目的意識もなく、心を動かすこともなかつた。代行者に任命され、殺人を仕事としなくてはいけなくなつたときも、返事一つで承諾した綺礼。そんなどこか空虚な人間だつた息子が、躊躇した。そのことが嬉しいのだと母は破顔する。

「それに綺礼。この子は特別なのよ、何てつたつて神様の類い稀な加護を受けているんですね」「神様の？」

「ええ、神様の。あ、でも父さんには秘密よあの人…それを知つたら絶対に報告しちゃうもの」

だから触れても大丈夫よ。あなたが気にしてても神様パワーでそんなのものともしないんだからと、悪戯つ子のように笑う母につられて綺礼も笑つた。

「だからこの子を護つてあげて」

才能というプレゼントをもらつて、神からの加護を受けていると  
いつても、今だ幼く自分を守ることが出来ないこの子をよろしくね

と母は笑つた。

「はい。」

それにしつかりと返事をし、今だ揺れる瞳で綺璃を見つめ、触るべきか悩んでいる綺礼の服をキュッと、握った小さな存在に戸惑いながら確かに綺礼は、その日初めて心を動かした。何が確かに変わり始めていた。

言峰綺璃。それが今世での名前だった。かつて敵として相対した男の妹になるなんて、どんな運命だと元、間桐雁夜は嘆息する。

（はあ、しかもイタリアなんて）

まったくもつてついていない。日本の冬木にいたならば、あの時臣と葵さんが接触する機会を潰してやるのに。

（ニヤ、まじよ…）

むかつくことに時臣と雁夜は、幼なじみというやつだった。そして自分は幼児、ということはあの憎たらしい時臣も幼児。

（だったら今は魔術とか、武術をとことん鍛えるか）

かつての自分はそれで失敗した。一年たつて魔術師にならうとして、知識もなかつたため臓硯に躍らされ、あげくの果ては終盤に自分が間違つていたことに気付き自殺ときた。今思いかえしても、顔から火ができるくらい恥ずかしいし、泣きたいほどに情けない。

（だけどこれで今度こそ葵さんを笑顔にできる）

もう一度と同じ間違いは犯さない。この身体では彼女と結ばれることはないが、それでもかまわなかつた。彼女が笑顔でいられる未来が作れるのであれば。

（まつてろみ時臣ーー）

就寝前のベットで固く誓うが、綺璃は一つ忘れていた。一つは今自分は、雁夜だったころーーは下であるう綺礼の、さらにーー下の妹であるということ。そして、妹を護るという目的をもち、超絶システムへと進化を遂げた兄と、田に入れても痛くないほどに親バカ全開で、猫可愛がる父がそう易々と魔術や武術を習わしてくれるわけがないということを…道は果てしなく遠そうである。

朝一でおねだりしてみたが光速で却下された。

曰く、魔術師と教会は相容れないのだから諦めなさい。

曰く、かわいい顔や大事な身体に傷がついたらどうするんだ。

曰く、兄さんが護つてやるから心配するな。

曰く、そもそも俺より弱い奴に教えをこう必要はない。以下エンドレス。

(まともな意見が一番最初しかなじつてビリコツだよ)

せめて母がいてくれればよかつたのだが、あいにく母は今フランスに友人達と旅行中である。

「あー、兄貴」

「…はあ、何度も言つが綺璃、お前は女の子なんだ。それらしい言葉遣いをしなさい…いや、までよただでさえかわいいのに、言葉遣いを治してしまつたら余計な虫が…いやでも」

さらには脱線し、話が全く進まない。これが外に出ると過保護なお兄様で済んでしまうのが怖いところである。つづづく、自身のまさに病弱で物静かなお嬢様といった姿が恨めしい。

先祖帰りだか何だかで、日本人離れした顔立ちに、白銀の髪に空を寫したような瞳。兄も最近ではよく笑うようになり、二人揃つていれば眼福間違いなしである、ただし今だに男言葉が、抜けない綺璃が口を開かなければという注釈がつくが。

「とにかく、魔術も武術も諦めなさい」  
「はあーい…」

少々、行き過ぎではあるが父も兄も自分を心配しての言動などと納得し、いざという時は兄に時臣をとつちめて貰おうと、些か黒いことを綺璃が考えていると轟音を響かせて玄関が蹴破られた。慌

ただしくビギングから玄関に向かう兄と、父についていくとやつては旅行中であるはずの母が悠然と立っていた。

「あなた、それに綺礼？ 私いいましたよね綺璃が、自分から魔術を習いたいといつたら許可してあげて下さいと」

その美しい顔は確かに笑っているのだが… それは見るものを恐怖のどん底に突き落とすものでしかなかった。それ以前になぜ、いなかつた時の会話まで把握しているのだろう。そんな母に父はともかく、あの兄まで顔から血の気が引いている。思わず綺璃は止めようかと母の袖を引っ張るがやんわりと制され、それ以上なにも出来なくなってしまう。しかし次の言葉で綺璃も血の氣をなくした。

「それに、もう遠坂には許可をもらっていますの。と、いうわけで魔術を習いに行くわよ綺礼、綺璃」

「は…？」

確かに魔術を習いたいと言つた。だがなんでよりによつて遠坂なのだ。しかし、遠坂を雁夜でなく綺璃が知つているはずもなく、結果反対も出来ずに入れよあれよあれよとこままに飛行機に乗せられ、兄と妹は、母と灰になつた父に手を振り日本に旅立つたのである。

「あに… 兄様、遠坂つて何ですか」

出発ぎりぎりまで母によつて、行われた教育といつもの拷問のかげか、女言葉、それも淑女（レディー）のよつなそれは思つたよりも、嫌悪も違和感もなくスルリと口から出ってきた。そのことにダ

メージを受けながらも、今は情報収集が第一だと綺礼に尋ねる。

「ああ、宝石魔術を得意とする一族だ。特に次期当主と名高い遠坂時臣は才はそれ程でもないが、努力と修練でもって一流の魔術師まで上り詰めた人物だ」

（あの、時臣が？）

にわかには信じられなかつた。だが、やはり自分が綺礼の妹として存在している世界だ。雁夜だつた世界との差異はあるだろう。少なくとも間桐雁夜の知る、遠坂時臣は才に溢れ誰よりも魔術師らしい奴だつた。

（「」の時臣は違うのかもな…）

「気にくわない時臣。だが、」ことかつて雁夜の幼なじみであつた時臣とは同一ではないのだと認識し直す。だからといって時臣に対する苦手意識も、憎悪もなくなつたわけではないので自分から近付くことはないだろう。

「そつそつ武術は俺が、気にくわないが魔術に関しては、2人ともその遠坂時臣に指示することになるそうだ」

「ふえっ？」

「何だ、意外だつたか…俺が魔術を学ぶことにしたのは綺璃を護る手段を増やすためだ。いうならば、魔術師ではなく魔術使いといつたところだ」

「いえ、それはありがたいのですが…」

「？、ならば行くぞ先方がすでに迎えに来ている

2人分のカートを片手で押す、兄に手を引かれ到着ロビーに向かう間、綺璃の頭は真っ白だつた。いくら雁夜であつたころよりも数

倍、才に溢れているといつても“あの”時臣に師事することになるなんて…いくら同一でないといつても大変遠慮したい。が、対立関係にある教会と魔術協会の現実を考えれば、簡単に変更等できないだろう。しかも相手は御三家の一つ遠坂である。喜ばれることはあっても、拒否される理由がない。

（詰んだ…完璧に…）

せめてもの救いは兄も一緒にあることだが、兄は超絶パソコンであるが認めている相手に対しても、著しくそのガードが低くなるのである。今回は母の紹介である上に、遠坂時臣の人柄はともかく実力とそこに到るまでの努力は認めている。つまり兄を使って時臣に危害を加えることは不可能。

さらにもうならば出発間近にやつと、時臣との年齢差をしつかりと理解した。時臣は綺麗の8つ上、現在13歳である。年少の身ですでに次期遠坂家当主と名高い彼に、自分ができることは現時点では皆無。いくら才に溢れていようが、後数年之内に彼に追いつき、追い抜くのもまた絶望的。

そして追い撃ちをかけるように、到着ロビーで待つ人の中に雁夜の記憶にない男に肩を抱かれ、赤ん坊をその手に抱き、ベビーカーを押す“遠坂葵”の姿を目にし綺麗の目の前は真っ暗になった。

ショックだった。時臣が兄より六つも下だといふことも、葵が雁夜だったころにはいもしなかつた、得体のしれない男と結婚していることが。

(…遠坂邸か)

田を覚ますと知らない部屋だった。気を失っている間に運ばれたらしい。見覚えはないが、荘厳な室内の雰囲気からあたりをつける。

(誰なんだうつな…アレ)

遠坂の分家筋のものだらうか。だとしたら幸なかもしれない、魔術は基本一子相伝。時臣が変わらず次期当主といふことは、あの男は魔術と何の関わりもない可能性が高い。

(とんだ皮肉だな)

理由がなくなってしまった。雁夜だったころの願いを、叶えたいがために魔術を身につけることを望んだのに、すでに彼女は幸せそうだ。つぐづぐ口といふものはタイミングを逃してばかりいる。

(なのに時臣に魔術を習わなくちゃいけないなんて…)

がつくりと肩を落とし頭をたれる。今更、断れるわけもない。しかも師事するのは時臣だ。一重の意味で苦痛である。それに引きず

られ、雁夜だつゝの時臣につけた諸々の所業も思い出されたらしく、ベットの上でさうに綺璃はうなだれる。そんな綺璃の意識を現実に引き戻したのは一つのノックだった。そうして入ってきた男に綺璃は目を丸くした。

「遠坂…時臣？」

「なんだ知つてたのか。だが初対面の年上を呼び捨てにするとはいただけないね」

相変わらずな時臣にやっぱり嫌いだと再認識し、すぐにベットを下り礼をとりながら、笑顔を張り付け迎え撃つ。

「失礼しました。吉峰璃正が長女、綺璃です。」

「知つているようだが遠坂時臣だ。智由紀さんには従兄弟が随分と世話をかけたね」

「母がですか？」

初耳だ、そして従兄弟とはあの得体のしれない男のことだらうか？

「ああ、詳しく述べ陸さんから聞くといい。そつちの方面では君の母君は有名だからね」

「は、はあ…」

有名つて何したんだ母さん…とシシ「ミ」たいし、気になる綺璃だつたが、おそらくその陸さんとやらに聞く勇気はでないだろ。笑顔一つで代行者である兄を、押さえ込める母の秘密なんて、數を突いて蛇なんてかわいいもんのじゃないと本能が警鐘を鳴らしているためである。

そんな綺璃について来なさいと一言告げ、絨毯が敷き詰められた廊下を歩きながら屋敷内の案内を始めた時臣は、おもむろに口を開

いた。

「聞いていると思うけど君達に僕が魔術を教える。正直、君は僕なんかよりも魔術の才に溢れている。だからこそ智由紀さんも無理を通したのだろう」

魔術師の世界では利害のぶつかったのならば、たとえそれが血縁であろうが師弟関係にあらうが、殺しあいに発展することは珍しくもない日常だ。

そしてどこまでも魔道をつきつめ、時に倫理や道徳すら捨て去るのが魔術師である。そんな魔術側と対立する教会側に、魔術の才の塊といつても過言でもない存在がなんの知識も持たず、教育も受けない状態でいればそれは、言葉は悪いがいい“力モ”だ。

「ここまで言えばわかるね？君はなんらかの目的があつて、魔術の道に入ったのかもしない。だけど目的以前にまずは、自分の身を守れるようになりなさい」

「はい…」

「よし。それじゃあ修業の間はこの部屋を使つてくれ。今日のところは何もしないから休んでくれていい、それじゃあ

「ありがとうございました」

わざわざ覚悟を決めさせるような言い方をしたのは、彼なりの優しさなのかもしれない。そういえば自分がまだ、魔術から逃げ出していくなかつたころは今のように、気を使ってくれたこともあつたかもと、綺璃は思い起します。

時臣との間に溝ができたのは、高校に入り本格的に魔術から逃げようになつたころだった気がする。それまでは、特に仲良くなかったが普通の幼なじみだった。きっと誰よりも魔術師たらんとした時臣に、魔術から逃げる雁夜の姿は何よりも忌むものとして「写つ

たのだね。

「だからっていっても嫌いだけどな

推測通りだとしても、そもそも生粹の魔術師たるつとする時臣の思考が、綺璃は理解出来ないので結局、この先も嫌いなままだろう。見下されてないだけマシかもしれないが、才に見合つだけの魔術師らしさを身につける、等と言われたらキレる自信がある。

「修業は明日からか…はあ、憂鬱だ」

深いため息をつき、荷物を整理すべく綺璃は部屋の隅にあつたカバンを引き寄せ、チャックを開け、そして固まった。

「え、嘘つ…！…なんでさ…！」

溢れだしたのは、ピンクにオレンジ、セルリアンにピピスタチオグリーン。さらには纖細なレースの雨嵐に、可愛らしいランジェリー。自分で詰めたはずの、ボーグッシュで機能性を優先した服は影もなかつた。極めつけは同封された手紙で、

「素敵なレディーになつて帰つてきてください。遠坂の家訓は“常に優雅たれ”なので丁度良いでしょう　　P.S. ここの修業は遠坂の奥様にお願いしていますので、逃げたりしないように　母より…　絶望だ」

またあの地獄が始まるのかと綺璃は涙する。

柔らかそうだが癖のない肩にどどく白金の髪は風に揺れ、海を掬いとつたかのような瞳は陽光に反射する。西洋人形を思わせる整つた容姿と、外国の血が入っているための色合には彼女に良く似合つていて“綺麗だ”そう素直に思つた。

「これはまた…凄いのがきちゃつたね～」  
「確かに魔術の才は桁違いだときいていますが…」

向こうから歩いてくる兄妹をみながら従兄弟が言う。どこか感心する従兄弟を見上げるが、彼が言いたいのはそういうことではなかつたらしく、首を横に振られ、何時ものどこか緩い口調が一変する。

「流石は智由紀の娘、か…凄いのがお守りについてる。正直、今からでも“こっち”に引きずりこみたい」

彼女　言峰綺璃の背後を鋭い目でみながら口元だけで笑いながら男、篠崎陸は言う。が、そう易々と貴重な人材を墮とされては敵わないでの、釘を刺そうとすると目前まで迫つた少女の身体が力を失い倒れた。幸い、兄が抱き留めたので打ち付けられることは、避けられたが完全に気を失つてしまつているようだ。

「智由紀と違つて、身体は丈夫じゃないのかな～」  
「…そうかもしないですね」

突然切り替わる相変わらずな従兄弟に、脱力しながらも早く屋敷に運んだほうが、良いだろ?と思ひ、射殺さんばかりにじからを睨みつける兄に深く一礼。

「遠坂家次期当主、遠坂時臣です。言峰綺礼さんと綺璃さんで間違いありませんね…迎えにあがりました」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5942z/>

---

Fate/another Zero

2011年12月20日18時37分発行